

1983年発行 舞台監督協会機関誌 NO.9 より

特集「劇場を考える」その三

音やの立場から 田村 憲

芝居をする小屋を、音響効果の側から考えると、先ず第一に、セリフの通りと明瞭度である。芝居ではなまのセリフは、明瞭で内容が客によく伝わらなければならない。役者の発声の良し悪しは別として、普通に判り易く発声したもので、声は聞こえるが内容が判らない時があります。それは多目的ホールによくみられる現象であります。

これは客席に於ける残響時間が長い為であって、防ぐことが出来る問題である。皆さんが小屋に入って、舞台ハナから客席に向かって声を出したり、手を叩くとその音は長く響いて残ることを体験なさったことと思います。

これは劇場やホールには必ずある残響なのです。この残響時間は現代の建築技術では如何ようにでもなるのです。

東京に於ける劇場、ホールを二、三例を引いて述べますと、音楽ものをよく上演する、上野の東京文化会館大ホール・新宿厚生年金会館大ホールは1・6～1・8 secと長く、国立劇場・日生劇場・俳優座劇場等芝居を中心としたものは1・0 secとなっております。

これは残響時間周波数特性と云って、1・0 sec/5 0 0 H²などと表示してありますが、つまり、5 0 0 ヘルツの音を舞台から発してその原音が消えてから残った音の時間が1秒間である事を示しています。芝居を中心とした劇場の1・0 secに比べて、前出の1・6～1・8 secは大変長いものであることがお判り頂けると思います。三越ロイヤル・シアターは0・6 secと大変低い為にセリフの明瞭度が抜群で、邦楽家も上手な人はキレが良いと喜びます。洋楽の場合、少し電氣的エコーを付加してやわらかくするときもあります。

皆さんも、風呂の中での唄はいい感じに聞え、又流行りのカラオケもエコーを付けて唄うと上手になった様になる。あれは残響が幸いして、下手な唄も程よくいい感じに聞える様にアラをかくしているのです。

昔の建造物は石造りで、教会やお城は良く響いた筈です。その中でのミサや説教、室内楽は厳かに美しく響いた事であろうと思われまふ。その名残りが日本に於ける西洋音楽家たちは、残響時間は長く欲しいと響くことのみを申しますが、今一つ考えを新たにしてもらいたいものです。残響の長かついたものは短くすることは出来ないが、短いものは電氣的に又は物理的に長くすることは容易なのです。

設計者も自分の建てようとするものの、使用目的を把握した人間の生活上から、建築物の音響特性を考えた内装設計や、電気音響設備に最大限の予算が投入出来るような、積極的意見を持って欲しい。外観や玄関、ロビー、客席のみ目立つものでなく、音響に関心の深いことも大切と思いまふ。外部騒音が聞えることは、もっての外だが、空調設備の騒音も、芸術を上演する場に適してはいません。それを黙認する設計者は、単なる物体を組立てる者で、血の通った芸術的設計者と云えるのでしょうか。設計者のみならず、建築施主の側からもこのような見識を充分に、今後建てられる劇場、ホールのあり方を考え直してもらいたいのです。

* 1983年発行の舞台監督協会機関誌 NO.9より原文のまま転載致しました。無断転載、使用は禁止です。